狩猟採集民オロチョンの集落の戸数規模

遠藤匡俊*・張　　政**

(1) 目　的

本稿の目的は，中国北東部の大興安嶺・小興安嶺周辺地域において狩猟採集生活をしていたオロチョンの集落の戸数規模を，従来の現地調査報告などに基づいて整理することである。オロチョンは，1953年頃から定住し始め，1990年代はじめには林業を主な生業とするようになっていた（王・関，1999)。本稿で対象とするのは，狩猟採集を主たる生業として移動生活をしていた1950年以前のオロチョンである。そのため，これまでに実施されてきた現地調査や聞き取り調査に基づく報告書などを資料として用いることになる。対象とするオロチョンは，ノロ，ハンダハン（図1）などの動物を仕留めて主な食糧にし，交易のためにリス，アカシカなどを捕獲していた狩猟採集民である（今西・伴，1948ａ，1948ｂ；今西，1952)。狩猟活動や移動の際にウマ（馬）やトナカイ（馴鹿）を用いるために，狩猟採集民でありながら遊牧民としての特徴をも保持していた。

狩猟採集民オロチョンの集落研究は，①世界の狩猟採集民と同様に，オロチョンの集落構成が流動的に変化していた可能性があること，②１列横隊というオロチョンの集落形態が信仰と密接に結びついていた可能性があること，の２点において重要であると考えられる（遠藤・張，2004)。このような集落構成の流動性，および１列横隊という集落形態は，いずれも集落が複数の住居（家族）で構成されていることが不可欠となる。１戸づつの住居がそれぞれ分散して分布する散村形態をとる場合，住居を最小単位とする限り，集落構成の流動性は生じないことになる。しかも１列横隊という集落形態も存在しないことになり，このために，オロチョンの集落研究においては集落の戸数規模を明確にすることが基本的な作業となる。集落とは，一時的ではあっても同時居住された人々の住居（家族）の集合のこととする。

(2) オロチョンの季節的移動と集落

オロチョンの集落は，広大な大興安嶺・小興安嶺周辺地域に点在しており（治安部參謀司調査課，1939ａ，1939ｂ)，しかも夏は河川の上流へ移動し，冬は下流へ移動しながら１年間に楕円を描いて谷を一周するという季節的移動を行っていた（赤松，1941)。この季節的移動は，通常２～３家族連れで行われたが，同行する家族数や顔ぶれは変化することがあった（森下，1952)。このことは，季節的移動の過程で何度も形成される一時的な集落の戸数が変化し，し

*　岩手大学教育学部地理学研究室
**　中国黒龍江省民族博物館／岩手大学大学院・教育学研究科・院生

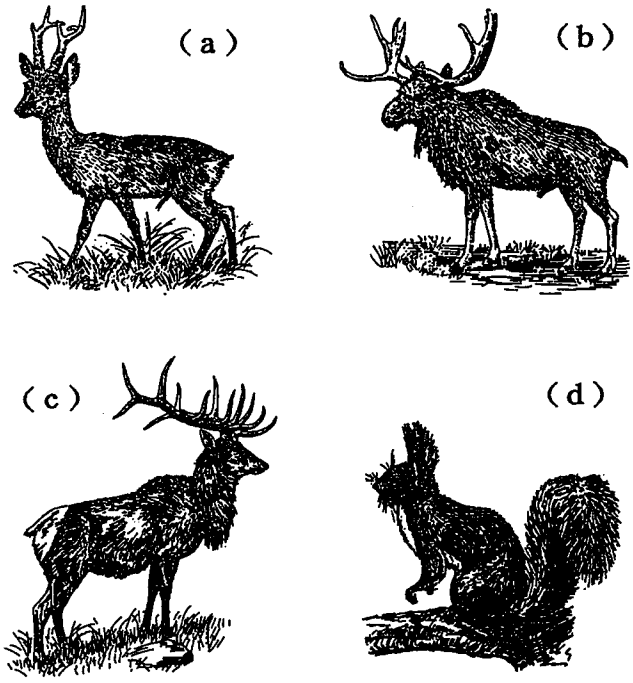

図1 主な狩猟対象となった動物

(a) オオノロ (*Capreolus pygargus pygargus* Pallas)

(b) シベリアエルクシカ (ハンダハン) (*Alces slces bedfordiae* Lydeckker)

(c) マンシュウアカシカ (*Cervus canadenisis xanthopygus* Milne-Edwards)

(d) ホクマンリス (*Sciurus vulgaris mantcuricus* Thomas)

(今西 (1952) による)

かも集落を構成する家族の組み合わせも変化していたことを意味する。さらに，夏には集落は各地に分散し，冬には限られた場所に集合するという事例もみられた (泉，1937)。このような季節的移動は，おもに猟場とされる一定地域内において行われたが，4～5年に1度の割合で他の猟場へ大きな移動をしていた (泉，1937)。つまり，一つの猟場内での季節的移動を伴う生活においては，集落の戸数規模は，夏にはより小さく，冬にはより大きくなっていたことになる。そのために，同一時におけるオロチョンの集落の位置，戸数，人口などを広域にわたって現地調査を行い，逐一確認することは極めて困難であったと考えられる。

オロチョンの住居 (家屋) はほぼ円錐形をしており，木製の骨組みの上から樹皮，草，獣皮などで覆うものであるが，移動するときは骨組みを残したままとなる (図2；泉，1937；治安部參謀司調査課，1939a)。そのために，残された骨組みの数から移動前の住居数を推測することがある程度は可能である。しかし，残された骨組みのすべてが同時居住された人々によって使用されたものであったのかどうかについては疑問が残る。なぜなら残された骨組みの一部は，他の骨組みとは居住日時が異なるものであった可能性があるためである。つまり，残された骨組みの数から移動前に同時居住した住居数を推測するという方法には，幾分かの危険性を伴うことになる。

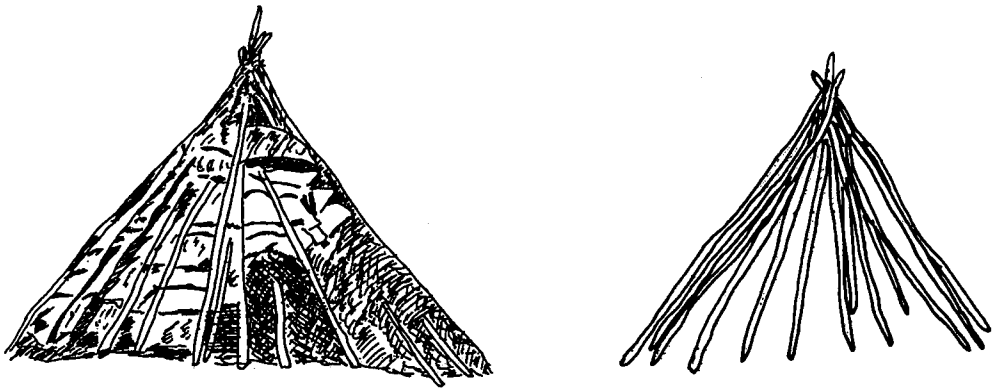

図2 オロチョンのテント（家屋）の外観と残された骨組み
（泉（1937）により作成）

本稿では，集落とは，一時的ではあっても同時居住された人々の住居の集合のこととしている。この定義に従う場合，広域的に集落の位置と戸数を知るためには，現地調査などによって誰と誰が一緒に居住する集落であるかが確認されることが必要とされる。

（3）夏のキャンプ・常住地の戸数規模

吉岡義人は，1934年6月にノミン川上流で6戸のテントの集落，ノルカン川上流で7戸のテントの集落の事例を現地調査によって確認している（秋葉，1936 a）。また，1934～1936年頃に調査を行った吉岡義人の記録によれば，「オロチョンは多く河川に臨む山腹，又は丘陵に，少きは一，二戸，多きも十戸位のテントを構え，テントは一，二間の間隔をおいて竝列するを常とする」とある（秋葉，1936 b）。

秋葉（1936 c，1941）は，根河上流地域における8キャンプの事例では1キャンプあたりの戸数が5.2戸，庫瑪爾路におけるオロチョン所在地49事例では1所在地あたりの戸数が9.4戸となることから，「通常十テント以下より成り、就中五テント内外のものが最も多い」（秋葉，1936 c，1941）としている。ただし，秋葉（1936 c，1941）のいう「キャンプ」は本稿の集落のことであると判断されるが，「オロチョン所在地」は必ずしも集落そのものではなく，複数の集落を含んでいた可能性がある。それでも66.7%（32／48）のキャンプは戸数10戸以下であり，37.5%（18／48）のキャンプは戸数5戸以下であったことになる。

1936年7月に大興安嶺南東部の綽爾河上流地域において泉（1937）はオロチョンの12部落に

表1　キャンプ別にみた戸数

1所在地あたりのテント数(戸)	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-30	31-35	計
キャンプ数	18	14	8	3	1	2	2	48

（秋葉(1936c,1941)により作成）

ついて詳細な調査を行った（図３）。泉（1937）のいう「部落」は，本稿の集落に相当するものと考えられる。12部落のなかで，湿原のために現地調査ができずに未確認の２部落については，部落ごとの戸数の内訳が不明であるために６戸の住居から構成される１部落とみなされている。そこで，この部落は対象外とした。また，４戸の住居から構成される１部落では，うち１戸は工作当局の命令によって滞在している。そこで，強制されて居住している１戸を対象外として，この部落の戸数は３戸とした。こうして１部落あたりの戸数を整理すると，表２のようになる。

（４）冬の常住地の戸数規模

1943年２月の莫力達瓦旗における常住地別の戸数が郡司（1974）によって示されている。この「常住地」は必ずしも集落そのものではなく，複数の集落を含んでいた可能性がある。

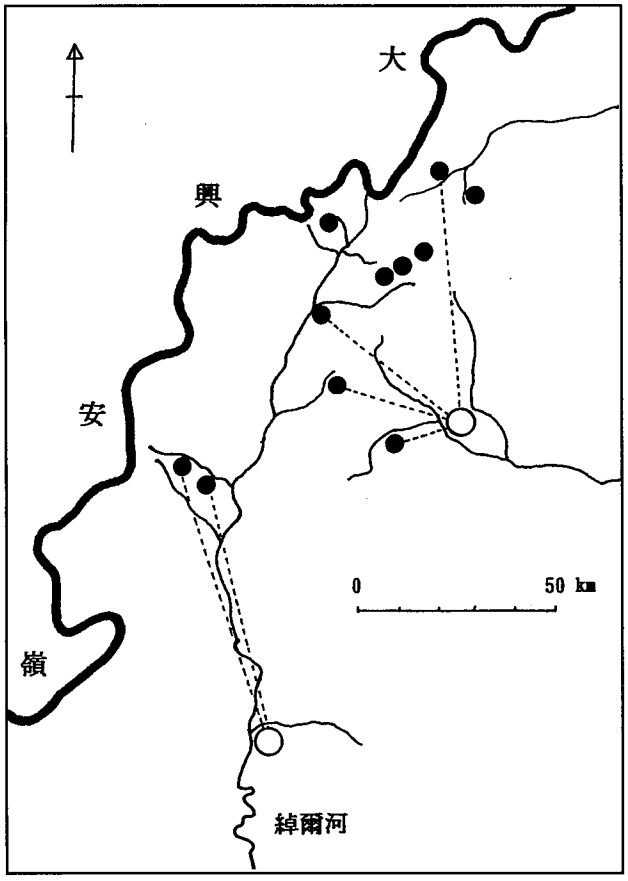

図３　1936年７月の大興安嶺南東部における集落別の戸数

●：集落

●…○：冬の集落（○）から移動して夏の集落（●）を形成したことを示す

（泉（1937）により作成）

表2　部落別にみた戸数

1部落あたりの戸数(戸)	1	2	3	4	5	—	9	計
部落数	4	4	2	0	0		1	11

(泉(1937)により作成)

表3　常住地別にみた戸数

1常住地あたりの戸数(戸)	1	2	3	4	5	6	—	17	計
常住地数	2	2	0	1	1	0		1	7

(郡司(1974)により作成)

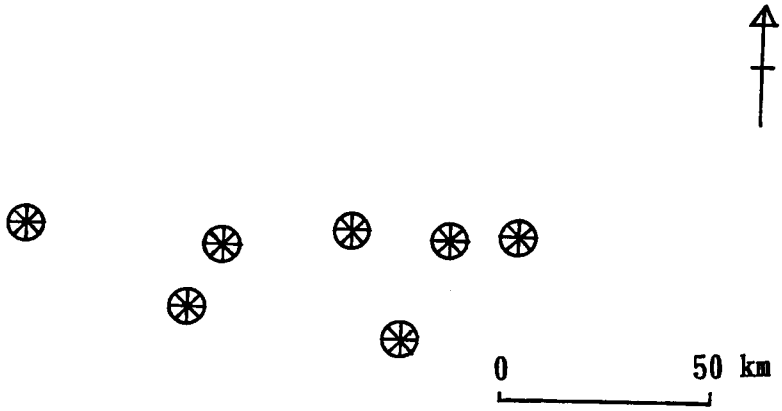

図4　1941年冬～1942年春のトナカイ（馴鹿）オロチョンの冬営地の戸数
(吉良（1952）により作成)

それでも85.7%（6／7）の常住地は5戸以下の家で構成されていたことになる。

吉良（1952）は，1942年6月の現地調査によってビストラヤ川上流地域における馴鹿（トナカイ）オロチョンの冬営地を発見し，その冬営地の見取り図（図4）を作成した。これは現地調査を行った1942年の前年（1941年）末から1942年春までの間に冬営したオロチョンの集落跡である。1942年6月の現地調査の際は，すでにオロチョンは他の土地へ移動した後であり無人の状態であった。見取り図（図4）には，7戸分の住居の骨組みが確認できる。しかし，1941年末から1942年春に冬営した同時居住者の住居（テント）は，7戸よりも少なかった可能性が残されている。

（5）狩猟のための露営集落

狩猟に出かけて露営するときには，布製の蚊帳状の天幕を仮の住居として用いたが，天気が悪いときにはさらに上から樹皮で屋根を葺いた（泉，1937)。地上に突き立てた木を支柱とし，

幅1.5メートル，長さ2メートル，高さ1.5メートルほどである。多くの人々が一緒に露営する場合には，風下側に開いたC字形（もしくは円村）という集落形態をとっていた（図5）。この露営集落は9つの天幕で形成されていた。泉（1937）によれば，「狩獵は男子の生活の殆んど大部分を占めてゐると云つても過言ではない」とされ，狩猟のための露営集落をとくに男性が頻繁に使用したものと考えられる。この狩猟のための露営集落でみられる集落形態は，オロチョンの集落で通常見られる1列横隊という直線形の集落形態（秋葉，1936b；秋，1978）とは異なる。

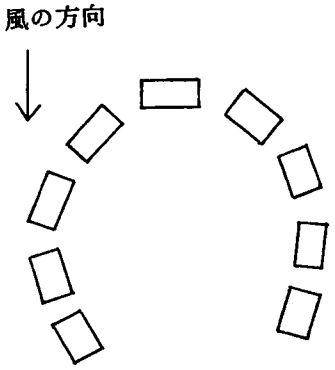

図5　1936年の狩猟のための露営集落
（泉（1937）により作成）

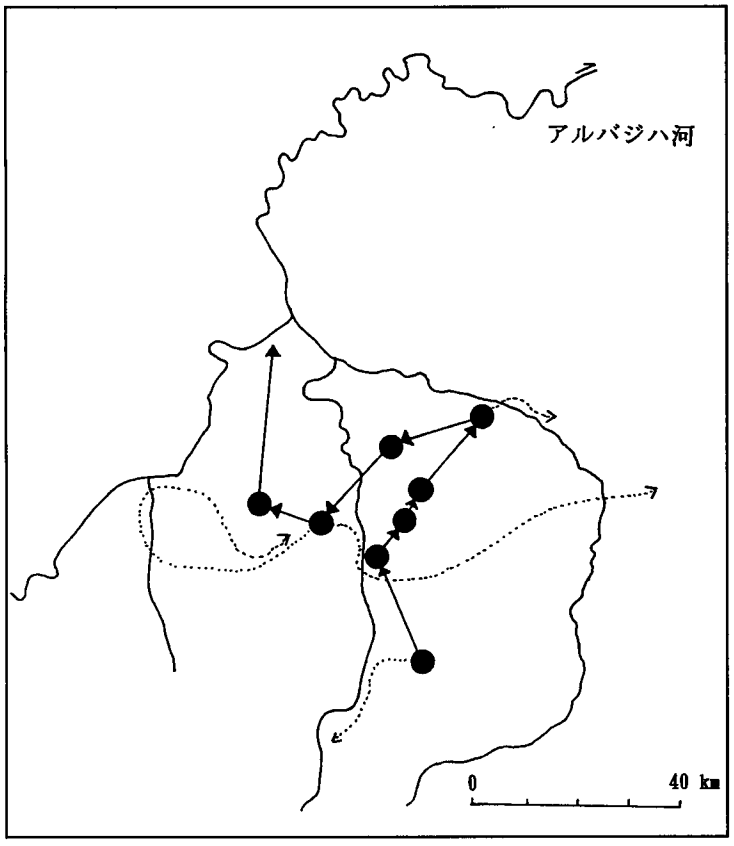

図6　トナカイ（馴鹿）オロチョンの狩猟のための移動

●：ユルタ（天幕），

→：1940年冬～1942年夏にかけてのある一家のユルタ（天幕）の移動経路

‥‥→　：ある一家の戸主のおもな出猟経路

（森下（1952）により作成）

泉（1937）による報告とは対象地域が異なるが，森下（1952）によれば，1940～1941年のトナカイ（馴鹿）オロチョンの場合には，家族と共に暮らす集落から30～60キロメートルも遠方まで狩猟のために出かけ，2～3日から30日ほども家族と暮らす集落には戻らないという(図6)。このようなときに，露営集落が形成されたものと考えられる。

（6）古老からの聞き取り調査による集落の復元

秋ほか（1984）は，1950年代中期～1960年代初期にオロチョンの古老から聞き取り調査を実施して，1900～1940年頃の大興安嶺・小興安嶺地域におけるオロチョンの集落に関する詳細な復元を行っている。秋ほか（1984）による報告例を地域別に整理すると（表4），4地域のなかでは小興安嶺地域で小規模な集落が多かったことがわかる。17世紀以前の集落の戸数は4～7戸であったという報告（秋，1978）からすれば，小興安嶺地域の集落がかつての戸数規模に近かったことになる。大興安嶺地域（表4中のⅡ，Ⅲ，Ⅳ）の集落では，小興安嶺地域における集落よりも戸数規模はより大きかったことがわかる。

大興安嶺地域の托河・諾敏河流域（表4中のⅣ）においては，1910年頃の訥門河ウリレンは4戸の住居（家族）から構成されたが，春と秋には2戸ずつの2集落に別れ，夏と冬には集合して4戸の1集落を形成して狩猟採集生活をしていた（秋ほか，1984)。この訥門河ウリレンの戸数は，4戸として集計されている。同様に，1928年頃の訥門河ウリレンは9戸の住居（家族）から構成されたが，春と秋には2～3戸ずつの集落に別れて狩猟採集活動を行い，夏と冬には訥門河上流にそれぞれの家族が戻り9戸の集落を形成していた（秋ほか，1984）が，これも9戸の集落として集計されている。

このように，古老からの聞き取り調査によって過去の集落が復元された結果，とくに大興安嶺地域で戸数規模がより大きな事例が確認された。しかし，その集落は夏と冬の集落であり，春と秋にはより小規模な集落に別れていた場合があった。このような事例から，表4に示された集落とは夏と冬に形成された集落（ウリレン）のことであり，この集落（ウリレン）は季節によってより小さな集落に別れることがあったこと，そしてこの小規模な集落は必ずしもウリレンとは見做されなかったものと考えられる。日本人研究者の現地調査によって記録されたオ

表4　1900～1940年のテント数別にみたウリレン数

地　域	1ウリレンあたりのテント数															計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
Ⅰ.小興安嶺地域	1		5	2	2	2		1			1		1			15
Ⅱ.多布庫爾河・甘河流域						1					1	1		1	1	5
Ⅲ.呼瑪河流域		1	3	2	2	3	5	2	1	4	2					23
Ⅳ.托河・諾敏河流域		1		1		1		3	1	1	1					9
計	1	2	8	5	4	7	5	6	2	5	5	1	1	1	1	52

（秋ほか（1984）に基づき張（2004）が作成）

ロチョン集落の戸数規模（表１～表３）が，ほぼ同時期のものでありながら，中国人研究者の聞き取り調査によって復元された集落の戸数規模（表４）よりも小さかったのは，このような理由によるものと考えられる。

秋（1978）によれば，オロチョンは引っ越すことによってそのウリレン（集落）から出ることが自由であり，同様に他のウリレン（集落）へ入ることも自由であった。このような集団の流動性は，同じ集落に居住する構成員が季節によって分裂したり集合するという，同じ顔触れの構成員の分裂・集合の繰り返しとは異なるものである。

（７）まとめ

1900～1940年の大興安嶺・小興安嶺地域において狩猟採集生活を営んでいたオロチョンの集落の戸数規模を検討してきた。その結果，10戸以下の住居（家族）で構成される集落が多く，５戸以下の集落が多い地域もあった。なかには春と秋には２～３戸ずつの集落に別れて狩猟採集活動を行い，夏と冬にはそれぞれの家族が戻り９戸の集落を形成した事例，あるいは，夏には各地に分散して冬には限られた場所に集合する事例もあった。このように季節によって集落の戸数が変化する場合があった。しかし，小規模な集落が形成される事例が多かったとはいえ，１戸の集落という事例は少なかった。つまりオロチョンの集落は，小規模ながらも複数の住居（家族）で構成されることが多かったことになる。

理論的には，集落を構成する住居（家族）が入れ替わる，いわゆる集団の流動性は，２戸以上（複数）の住居（家族）で構成される集落において，はじめて生じ得ることになる。
オロチョンの集落の戸数規模はこの条件を満たしており，集落レベルにおいて集団の流動性が生じていた可能性，および，１列横隊という集落形態が存在していた可能性は十分にあることが判った。

なお，オロチョン社会における集団の流動性の詳細な実態については，張（2004）が岩手大学大学院教育学研究科修士論文のなかで明らかにしており，その内容は稿を改めて公表する予定である。

キーワード：オロチョン，集落，狩猟採集民，集落の戸数規模
Key words：Orochon, settlement, hunter-gatherer, settlement size

本研究では，平成１５年度岩手大学活性化経費（申請区分：展開・戦略的研究，研究課題：狩猟採集民の文化に関する国際共同研究に向けて）を用いた。

文　献

赤松智城（1941）：總説．赤松智城・秋葉　隆：『満蒙の民族と宗教』．内外出版，1-53頁．

秋葉　隆（1936ａ）：トケブ吉岡君オロチョン踏査記（二）－興安嶺山中六百日－．満蒙，17(8)，138-151頁．

秋葉　隆（1936ｂ）：トケブ吉岡君オロチョン踏査記（三）－オロチョン民俗斷篇－．満蒙，17(9)，109-119頁．

秋葉　隆（1936ｃ）：大興安嶺東北部オロチョン族踏査報告（一）．京城帝国大学文学会論叢，４，1-48

頁.
秋葉　隆（1941）：オロチョン族. 赤松智城・秋葉　隆：『満蒙の民族と宗教』. 内外出版, 55-157頁.
泉　靖一（1937）：大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告. 民族学研究, 3(1), 39-106頁.
今西錦司編（1952）：『大興安嶺探検－１９４２年探検隊報告－』. 毎日新聞社, 534頁＋18頁.
今西錦司・伴　豊（1948ａ）：大興安嶺におけるオロチョンの生態（一）. 民族学研究, 13(1), 21-39頁.
今西錦司・伴　豊（1948ｂ）：大興安嶺におけるオロチョンの生態（二）. 民族学研究, 13(2), 42-61頁.
遠藤匡俊・張　政（2004）：狩猟採集民オロチョンの集落研究に向けて. 岩手大学教育学部研究年報, 63, 71-80.
吉良龍夫（1952）：急行軍. 今西錦司編：『大興安嶺探検－１９４２年探検隊報告－』. 毎日新聞社, 361-365頁.
郡司　彦（1974）：『満洲におけるオロチョン族の研究』（興安友愛の記・別冊）. 郡司　彦, 25頁.
治安部參謀司調査課（1939ａ）：『満州ニ於ケル鄂倫春族ノ研究 第一篇』. 治安部參謀司調査課, 101頁＋34頁＋付図（２葉）.
治安部參謀司調査課（1939ｂ）：『満州に於ける鄂倫春族の研究 第四篇 馴鹿鄂倫春族』. 治安部參謀司調査課, 40頁＋21頁＋12頁.
森下正明（1952）：トナカイとともに. 今西錦司編：『大興安嶺探検－１９４２年探検隊報告－』. 毎日新聞社, 300-307頁.
秋　浦（1978）：『鄂倫春社会的発展』. 上海人民出版社, 212頁.
秋　浦・布　林・趙　复興・敖　楽綺・莫　金臣（1984）：『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊・鄂倫春族社会歴史調査』. 内蒙古人民出版社, 363頁.
王　宏剛・関　小雲 著, 黄　強・高柳信夫・荒山美恵子・大間知利尚・額田基嗣 訳, 萩原秀三郎 監訳（1999）：『オロチョン族のシャーマン』. 第一書房, 364頁.
張　政（2004）：狩猟採集民オロチョンの社会構造の流動性－ウリレン（集落）構成の流動性のメカニズム－. 岩手大学大学院教育学研究科・修士論文, 66頁.